

薬草園の花だより

第 27 号

2021 年（令和 3 年）3 月 3 日発行

■第 27 号に寄せて

2021 年を迎えてからも「新型コロナウイルス」禍の影響は続いています。本来ならば、学位記を授与される学生の皆さんはもとより、御父兄の皆様、教員らも参加のもと、厳かな学位記授与式が挙行される所、今年は代表者出席の形での挙行とのこと。残念ではありますが、この事もいつか思い出の一つとなるのでしょうか。いずれにせよ、学位を授与される皆さん、まことにおめでとうございます。また、2021 年 3 月 11 日はあの忌まわしい東日本大震災からちょうど 10 年目となります。復興が進んでいるところがある一方、まだまだ以前の生活を取り戻すにはほど遠いところもあります。何とか以前の生活が取り戻せることを祈念しています。普通の生活がどれだけありがたいものであったのかを思いおこさせる日々です。[「花は花は花は咲く〜」(岩井俊二作詞『花は咲く』より／岩井氏は小生の母校仙台一高の後輩)]

この時期は花が少ないですが、それでもよく見るとそこらこらに花は見られます。建学碑の前にビオラがたくさん植えられました。ビオラとはスミレの仲間の属名 (*Viola*) で、その語源を探ると、スミレの原種の基準となる色が紫色 (violet) であることからきているとのこと。英語で violet という一般にスミレのことになります。なお、この violet は古い時代のフランス語で「小さな」を示すとか。弦楽器のビオラも語源は同じで、「小さい弦楽器」を示すのだとか。そして、

バイオリン (violin) という名称はビオラよりさらに小さな弦楽器という意味だそうです。

かつてはビオラよりもパンジー (pansy) の人気が高かった時期がありました。パンジーの語源はフランス語のパンセ (思想・思索) 由来。その花の様子が「もの思いに耽る」姿を思い浮かべさせるためでした。建学碑の左右の端には小型スイセンのティタ・テートも咲き始めていますが、ティタ・テートとはフランス語由来であり、「ないしょ話」という意味とのこと。やはり、人間の仕草を名前にしていてかわいらしいですね。

かつてパンジーの花を大きくするという品種改良が流行り、その表現も「大輪→巨大輪→超巨大輪」



日本薬科大学建学碑前にて



スイセン (ティタ・テート)

と表現がエスカレートしたのを覚えています。かつては「三色スミレ」などと呼ばれ懐かしやかな印象でしたが、ついには幼児の掌大の花も出現しました。しかし、いつのまにかまた、可愛らしい原種に近いビオラに人気が戻ったみたいで、スミレの仲間は、最近、野趣のあるものに近い方が好まれるようです。



ビオラの花殻

本学のキャンパス内でもやがて、とくに薬用植物園周辺にいわゆる紫色をした野生の「スミレ」類が多く咲きます。是非、観察にいらしてみてください。わが国に自生するスミレ属は 70 種以上といわれ、実は、日本は世界有数のスミレ大国なのです。この僥倖、楽しみましょう。

ところで、パンジーとビオラはどう異なるのでしょうか。実は両者の確たる区別はなく、園芸植物の世界では一般に花の大きなものをパンジー、小さなものをビオラと呼んでいます。

ビオラは初夏に至るまで次々に花を着けますが、そのままにしておくと蕾の出が悪くなります。それを避けるために「花殻 (はながら) 摘み」をします。咲き終わりそうになった花を摘み、結実させないようにするわけですが、摘んだ花殻も、なかなか風情があって美しいものですね。

(日本薬科大学薬用植物園長／船山信次)

■今咲いています・見頃です

英国の詩人シェリーの詩の翻訳「冬来たりなば春遠からじ」とはまさにその通りで、寒い日もありましたものの、いつのまにか春めいた日もあり、薬用植物園でも種々の草花が春を迎える準備を始めました。

薬用植物園の近くでは昨年、実に多くのヤマユリが開花しましたが、今、その場所では、種子を放出して枯れたヤマユリの蒴果 (さくか) がたくさん風に揺れています。そ



ヤマユリの蒴果の冬姿

の根元からはまもなくヤマユリの太い芽が顔をのぞかせることでしょう。園内ではオウレンの花が終わり、温室内でもアマリリスの花が終わりました。まもなく、本格的な春を迎え、種々の花たちが競うように咲き乱れ始めることでしょう。

《ウメ》

キャンパス内の数カ所にてウメ (*Prunus mume*/バラ科) の花が満開となりました。一部の花はもう満開の時期を過ぎようとしています。ウメについては以前 (21 号) にキャンパス内の紅梅を紹介したことがありますが、果実は生薬の烏梅 (うばい) の原料となります。また、そこでは、令和という元号の起源が梅花に関係し、令和と書いて令和 (なぐし) と読めば、これは「くすり (薬)」の語源であることも述べました。長いこと、サクラに対するウメの良さをなかなか理解出来ずにいましたが、今は、香りも良くそして整った花の姿は実に魅力的なものと感じ、大好きな花のひとつとなりました。

《サザンカ》

薬用植物園では、サザンカ (*Camellia sasanqua*) の花がそろそろ終わり、ツバキ (*C. japonica*) の開花に移りつつあります。これらはいずれもツバキ科の植物ですが、一般に、サザンカの方は年末～晩冬に咲き、ツバキは春に咲きます。また、花が終わったとき、ツバキは花ごとごとりと落ちますが、サザンカの方は花びらがバラバラになって散ります。

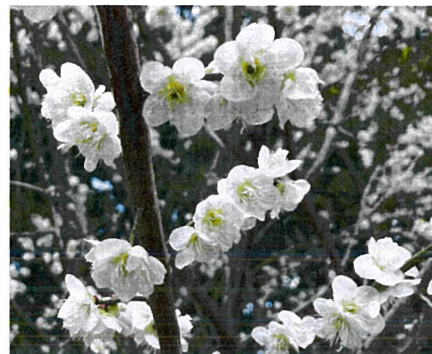


サザンカ

緑茶や紅茶、烏龍茶などの原料となる

チャ (チャノキ) もツバキ科の植物で、かつての学名は *Thea cinensis* でしたが、近年ではチャノキは *Camellia* 属に統合され、その学名も *C. cinensis* となっています。

ご存知のようにチャノキの葉から調製される緑茶や紅茶などにはカフェイン類のアルカロイドが含まれています。大変面白いことに、世界 4 大飲料とも言える緑茶、紅茶、コーヒー、ココアのうち、コーヒーやココアはそれぞれ、植物学的にチャノキとは



ウメ



コーヒーノキ

全く異なるコーヒーノキ (アカネ科) およびカカオ (アオイ科) を原料とするにもかかわらず、これらにも共通にカフェイン類のアルカロイドが含まれます。このことは植物文化誌的にも大変に興味深いことだと思います。

なお、カカオから調製されるココアやチョコレートなどにはカフェイン類のうたとくにテオブロミンを多く含みます。イヌなどはテオブロミンを代謝する酵素が乏しいために、たとえばチョコレートを食べてしまうと中毒します。いくらペットが可愛いからといってもペットにチョコレートを食べさせるのはNG。薬用植物園の温室では、もう少しでコーヒーノキの花が咲こうとしています。

■寒さやコロナ禍にもかかわらず元気な植物たち

夏の藤に対抗するのが冬の竹だそうで、冬のタケ類は青々として元気です。キャンパス



キャンパス内の竹林 (モウソウチク)

内ではモウソウチク (孟宗竹) の竹林が見事です。一般に筍として多く食べられるのはモウソウチクであり、わが国の自生植物と考えられるマダケの方はその材が柔軟であることから、竹弓や工芸品の材料にされます。

埼玉キャンパス内の管理棟の近くではナツミカンがたくさん実を付けています。

こちらも真冬であっても青々としていますが、柑橘類がよく育つのは埼玉が暖地である証拠です。冬の期間に屋外で柑橘類が元気に育っているのを見るのは北国育ちの人間にとってはまさにあこがれとも思える情景です。



ナツミカン

■薬用植物園からのお知らせ

《是非引き続き興味を持ち続けてください》

まもなく本格的な春ですね。新型コロナウイルス禍のために、学生さんたちの大学構内への入構制限は続けられていますが、薬用植物園ではいつ皆さんがいらっしゃっても対応できるように植物の世話が続けられています。皆さんが自由にキャンパスに入れるようになりましたら、是非、薬用植物園も訪れることをお勧めします。お待ちしております。

発行：日本薬科大学薬用植物園